はしりかねと八つの村のものがたり

辺見じゅん

北井一夫

文藝春秋

はしりかねと八つの村のものがたり

辺見じゅん
北井一夫

文藝春秋

©Jun Henmi, Kazuo Kitai 1977
Printed in Japan

はしりかねと八つの村のものがたり

定価一二〇〇円

一九七七年八月二五日 第一刷

著者 辺見じゅん
北井一夫

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話〇三―二六五―一一一一

印刷 共同印刷
製本 矢嶋製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

目次

今は幻のはしりかね 7
磯部町的矢(三重県)

生きたまま鬼となった 31
青海町(新潟県)

風でみごもる 55
加太(和歌山県)

あすこん太か男と太か女 77
小国(熊本県)

けものたちと生きる遠野 97
附馬牛(岩手県)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

雪の中のいざり機 119
六日町（新潟県）
おさよは二人いた 141
奥能登（石川県）
七色の紙漉く里 163
仁淀川（高知県）
山の中に海はあった 185
海（岐阜県）
あとがきふうに 218

装幀　代田奨

はしりかねと八つの村のものがたり

今は幻のはしりかね

磯部町的矢（三重県）

读，需要完整PDF请访 www.ertongbook.com

小梅ばあさんはいつも長いキセルできざみ煙草をすっていた　おばあさんの部屋は六畳で　表の土間で子供相手の駄菓子屋をやっていた

十年前までさだきち屋という船宿をやっていたおばあさん　船の人たちがこの部屋に寝泊りしていた

菜を売ろうえい——

冬ざれの日だまりのなかに、的矢の船着き場はあった。

三重県磯部町的矢は、近鉄線穴川から渡鹿野行きの巡航船で三十分、S字形に伊雑浦を抜けた地点にある。

船着き場の石段をのぼると、番所から綿入れを着た老女が顔を出した。通りすぎようとして、宿はないかと聞いてみた。

——宿ですかのう、教えましょうかな。

老女は気さくにいい、電話で聞いてみようかいなと家へ連れていってくれた。

出窓のある小さな家だったが奥行きはありそうだ。玄関口に「笑門」と書かれた札としめ縄が張ってある。笑う門には福きたるの縁起もので、どこの家でも正月になると門松の代わりにつけ、一年中つるしておくそうだ。

——不幸がありますやろ、そんときは海に捨てますんや。的矢にも五つか六つ、ないうちがありますやろな。

老女の家は、いつだったか広島の港町でみかけた船宿に似ていた。

——そうですな、わたしの子ども時分は船宿してましてな、二階に十畳が三つありますが、よう

け、船の人が来よりましたわな。的矢にはうちの他にも、長崎屋、阿波屋、讃岐屋、土佐屋と諸国の名をつけた船宿がありましたんさ、土佐の船なら土佐屋に泊まりましたな。的矢には、伊丹の酒船、紀州の材木船、讃岐の塩船とたんときましたんよ。

的矢の町を歩いていった。道は海岸の石垣から一筋の帯となって伸びている。道幅は狭く、家家が軒を並べている。門のある家はほとんどなく、小さな家が多かった。硝子戸に「土佐屋」と書かれている家があり、往時の面影を残していた。

その夜、老女から紹介された宿に泊まった。客はカメラマンの北井さんと私だけである。ひっそりとした玄関脇には、明治期の的矢港の写真が飾られていた。港いちめんに千石船が帆を並べた景色には、風待ちの避難港として栄えていたころを感じさせた。

江戸時代、鳥羽港は熊野灘から遠州灘を経て下田港までの長い海路の唯一の港だった。檜垣廻船、樽廻船はもとより大小の船がここに寄港し、日和山で日和を見定めて出帆した。天候不順の折には、船は幾日でも日和待ちをした。鳥羽をはじめ、志摩の小港もおおいに栄えた。安乗、渡鹿野、三箇所、的矢などがそうである。わずかな田畑と漁業で細々と暮らしていた貧しい土地が、新しい港町として注目をあびた。船が着きはじめると男たちを相手にした遊女屋が生まれる。すると船乗りたちは意識して船をつけるようになる。船問屋や遊女屋が立ち並び、港町特有の絃歌

のにぎわいが見られた。

古い写真を見ているうちに、眼前に広い海が広がっていった。黄昏があたりを包んでいる。夕べの七ツ過ぎころであろうか。何艘かのチョロ舟がはるか沖へと向かっていく。チョロ舟の艫の方にはあねさん女郎が、舳には十三、四の少女たちが乗っている。木綿縞に小倉帯を無造作に締めた女たちは大風呂敷の包みを携えている。衣類や日用品が入っていた。沖のなじみの船へと近づくと、そのまわりを漕ぎ回り、

「ようえい、ようえい」

「菜を売ろうえ、菜を売ろうえい」

菜を一把ずつ抱え、喚びあう声が谺した。

「菜を売ろうえ」というのはお上へのいいのがれである。男たちの見立てがすむと、女たちはつぎつぎに船にあがる。三味や太鼓の音にまじって嬌声がはじけた。

やがて、絃歌の音も止み、寂々と夜は更けていく。

「むかし、志州の海辺にかねといへる女あり。ぬひ針の手ききなれば、親船に小舟にて通ひ船頭の着物などぬひて渡世の為にせしが、後には売女を兼たりしを、異名をつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com